現場から変える 循環型社会の廃棄物

第2回　ごみ減らし

河野　博子 ジャーナリスト Hiroko Kono

1979年早稲田大学政治経済学部卒業、読売新聞東京本社に入社。1991年、米コーネル大大学院で修士号を取得（国際発展論）。社会部次長、ニューヨーク支局長を経て2005年から編集委員。2018年2月に退社、中央公論、月刊ガバナンス、東洋経済オンラインなどに記事を書いている。公益財団法人「地球環境戦略研究機関」「日本産業廃棄物処理振興センター」の理事。著書に「アメリカの原理主義」（2006年、集英社新書）、「里地里山エネルギー」（2017年、中公新書ラクレ）など。

◆連載にあたって◆

最近、持続可能（sustainable）という言葉をよく聞くようになった。2015年9月の国連総会で「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」が採択され、大量生産・消費・廃棄を見直す動きは本格化してきた。ごみを資源として使っていく流れが強まり、循環型社会という言葉が市民権を得つつある。日本の様々な現場で、こうした理念をすでに実践し、新たな方向を拓いた人たちがいる。耳を傾けてみたい。

ジュースやビールなど缶飲料の飲み口が、ひと昔前までは今と違う形だったことを御存知だろうか。引っ張って開けると缶本体からはずれる「プルタブ」方式だったのを、そのまま缶に残る「ステイオンタブ」方式へと変えて欲しい――飲料メーカーを相手に粘り強く働きかけたのは、東京・大田区六郷の主婦たちだった。日本の缶飲料をごみが散乱しない形に変えた消費者運動の成功事例として知られる。リーダーの矢野瑞耶さんが、抜群の調査・行動力を駆使した主婦パワーを振り返る。

自宅で主婦たちの活動を振り返る矢野さん（今年4月、河野博子撮影）

矢野瑞耶さん（やの・みずや）　略歴

1928年3月、愛媛県生まれ。愛媛県立今治高等女学校卒。91歳。
大田区六郷生活学校会長、大田区生活学校連絡協議会会長、公益財団法人・東京のあすを創る協会理事。

■自宅で始めた空き缶回収

――主婦が身近な生活の問題を取り上げて学習や実践活動を行う生活学校にどのように関わりだしたのですか。

私の父は愛媛県で食料品を扱う店と卸問屋をやっていたのですが、千葉県にある社会人の教育施設で年に一度の研修を受けたり、町会長をしたりしていて、「地域のために何か心掛けなさい」が口癖でした。

昭和25（1950）年に父親同士が同郷で知り合いだった夫と結婚しました。当時は戦争で焼け残ったバラックがポツポツ建っていたような大田区六郷で暮らし始め、その後夫の両親も上京して合流しました。昭和38（1963）年に義父が亡くなった後、娘3人が通った西六郷小学校のPTA役員を引き受け、小学校に婦人学級ができて生涯学習を始めました。その流れで蒲田に開校した蒲田生活学校に入り、昭和53（1978）年には、地元の六郷に生活学校ができました。

当時、生活学校で扱うテーマはしゅうとめと仲良くするにはどうするかとか、子供の育て方などが中心でした。女がでしゃばったらやられる時代でしたから、ここに来れば話ができる、と参加者が増えて行ったのです。

――空き缶の回収はどのように始まったのですか。

ある時、「東京都のごみの埋め立て処分場に見学に行くバスに空きがあるから、生活学校の皆さんもどうですか」と誘われました。蒲田清掃局主催の見学でした。埋め立て処分場にごみがダーッと山になっていました。これから埋め立てる予定の海域はごみが流失しないよう囲いがしてあって、水面に空き缶がぷかぷか浮いていました。帰りのバスの中で、「空き缶はごみではなく資源なのだから誰かがなんとかしなければ」という話になりました。「そのくらいのことだったら私でもできるわ」と、空き缶の回収を始めたのです。

紙に「空き缶は資源です。1円で買い取ります」と書いて、自宅の前に貼りだしました。昭和55（1980）年のことです。区役所にもまだ資源回収の制度はできていませんでした。※ 空き缶のポイ捨てなどが世間で話題になり始めたころで、区役所も住民からの問い合わせがあると、「矢野さんのところで回収している」と答えていたようです。

――買い取り費用などのお金はどうしたのですか。

よくそれを聞かれるのですが、私はお金のことはあまり考えないで行動してしまう。生活学校の年会費は一人1000円でしたから。どこから出て来たんだか。最初に空き缶を買い取るお金は私が出すけど、ちゃんと返ってきましたよ。でも空き缶ってね、集めたらまたお金になるんですよ。区役所でそのうち制度ができて、空き缶を集めて報告書を出すと1㌔当たり4円をくれて、さらに業者に譲ると㌔7円で売れますから、1㌔11円が入る。とにかく空き缶が山のごとく集まって。私の家はすっかり空き缶に取り囲まれてしまいました。

町会長さんが、3丁目の公園を空き缶の置き場にしてもいいよ、と言ってくれたので、私をはじめ、生活学校の主婦らが空き缶を踏んでつぶし、自転車の前と後ろに積んで運びました。外から家の中に入ると、蟻がツツーっと列になっている。家のどこかに砂糖がこぼれているのではと探すけど、見つからない。外に置いてあるジュースの空き缶が蟻の発生源だったのですね。空き缶はつぶして水をかけるんですけど、虫が飛んで来たり。やっぱりゴミなんですよ。

自宅前の空き缶の山と長女の岡田典子さん（矢野さん提供）

――近所の人から苦情は出なかったのですか?

私、その前は、きれいにして和服を着て目立っていたんだと思います。それが、子供を背中に背負って糖尿病を患っていた義父を病院に連れていったり、義父が亡くなってからは、毎日空き缶と格闘したり。そんな私の姿を見て大変だと思ってくださったのでしょうか。ご近所の方々は誰も文句をおっしゃいませんでしたよ。

――ご家族は嫌がらなかったのでしょうか。

主人は高校や短大などで英語を教えていたのですが、空き缶回収を始めたころは、外から帰ってくると、顔をしかめていました。臭いがするんですね。でも全国から大学の

※大田区清掃事業課によると、1992年7月から、「大田区リサイクル活動（通称は集団回収）」制度がスタート。リサイクル活動を促すため、区内の町会や生活学校などが家庭から出る新聞・雑誌などの古紙や空き缶、びん（リターナブル）、古着などの資源を自主的に回収して資源回収業者に渡す活動を行った場合、その団体に「報奨金」を支払っている。各団体は、大田区の登録回収業者に渡す（売却する）。売却先や価格は、その団体と業者間の取り決めで決まる。

空き缶の回収作業で忙しい主婦ら（矢野さん提供）

先生が訪ねて来たり、マスコミの取材が来たり、対応してくれるうちに、だんだん（空き缶回収の意義を）理解してくれたのだと思います。

■プルタブ問題に取り組む

――プルタブの問題にはどのようにして取り組んだのですか。

空き缶回収を続ける中で、私たちは一つの疑問を持ちました。六郷の釣り具屋さんから空き缶を回収してくるメンバーが、「プルタブは海へ放り捨てられているのではないか」と言うのです。道路に落ちているプルタブを拾ってビニールの袋に入れたり、ひもに通して持ってきたりする人も増えてきました。

日本では昔、会議がある時には女性がお茶を出していました。そのうち、お茶の代わりに缶飲料が出るようになった。飲み口をもぎ取って、どこに置きました?皆、意識していません。私たちは、「無意識の散乱物」と名付けました。

海岸の砂の中に落ちていたプルタブで足を切ったという話も聞くようになりました。

プルタブの山（矢野さん提供）

平成元（1989）年に回収した空き缶9444個について、空き缶の中にプルタブを入れてある缶がいくつあるか、調査をしました。ビール、ジュース、混合缶対象に計53回に渡って回収した際に調べたのですが、缶の中にプルタブが入っていたのは、わずか5.9%だったのです。4.3%は輸入したステイオンタイプの缶でしたが、なんと89%、約9割の缶のプルタブがどこにいったか分からず、行方不明状態であることがわかりました。

例えば、多摩川の土手には、約100㍍行く間に約600個のプルタブが落ちていました。

表1 プルタブの行方調査（1989年9月、1988年）

	回収空き缶総数	缶の中にプルタブが入っていたもの	ステイオンタブの缶	残った空き缶
1989年9月	9444 (100%)	556 (5.9%)	408 (4.3%)	8480 (89.8%)
1988年	3907 (100%)	185 (4.7%)	142 (3.6%)	3580 (91.7%)

（出典：「東京都大田区六郷生活学校」著、「資源問題第2号　飲料缶の飲み口について」から）

表2 平成2（1990）年に全国生活学校連絡協議会空きカン専門部会がまとめた「缶飲料飲み口のアンケート調査」の結果

▼プルタブをどう処理していますか。

	缶とプルタブを別々に捨てる	缶に入れて捨てる	その他	わからない	無回答	計
実数	23	115	4	4	1	147
%	15	78	3	3	1	100

▼プルタブがごみ箱などの外に散乱しているのを見て気になったことがありますか。

	ある	ない	無回答	計
実数	124	23	0	147
%	84	16	0	100

▼プルタブが原因でケガをした経験や、そのようなことを聞いたことがありますか。

	ある	ない	無回答	計
実数	52	94	1	147
%	35	64	1	100

▼ステイオンタブが普及していったらいいと思いますか。

	思う	思わない	わからない	無回答	計
実数	112	9	26	0	147
%	76	6	18	0	100

（出典：1990年3月15日発行の「生活学校全国連協だより」）

——アメリカに調査に行かれたとも聞きました。

昭和 57（1982）年に夫の出張についていく形で、ロサンゼルスやサンフランシスコで空き缶の状況を調べました。カリフォルニア州では、プルタブ方式は禁止され、空き缶はステイオンタブ方式になっていました。タブが容器から離れないのでゴミの散乱を防げるというのです。さらに、缶には「プリーズリサイクル」「5 セント返金」などと書かれ、店にもっていくと 5 セントくれるデポジット制が導入されていました。

資源のない日本では「空き缶は屑籠に」と書かれているのに、資源が豊富で大きな国、アメリカで「プリーズリサイクル」と、空き缶が資源として扱われていることに驚きました。

——プルタブからステイオンタブへの変更について、メーカー側と話し合いを重ねたと聞きました。メーカー側の反応はどうだったのですか。

六郷生活学校が行ったメーカー側との対話集会は、昭和 59（1984）年から 9 回、足掛け 6 年に及んだのですよ。飲料メーカー側は、「日本人は衛生観念が強いので、もぎ取るプルタイプを好む」「ステイオンタブは、製造コストがかさむ」「ステイオンタブは飲み口がプルタブ方式より小さくなって飲みにくくなる」「缶を製造する機械を入れ替えなければならなくなる」などと反論し、後ろ向きでした。

でも私たちの空き缶調査によると、回収した缶の中に輸入もののステイオンタブが混入しており、輸入業者の一覧表を作ってみると 60 業者以上もあった。スーパーや街の自動販売機にもそうした輸入缶が入っている。こうした点を追求するうち、メーカー側にも米国のメーカーと提携してステイオンタブの缶を試験的に導入してみるなどの動きが出てきました。

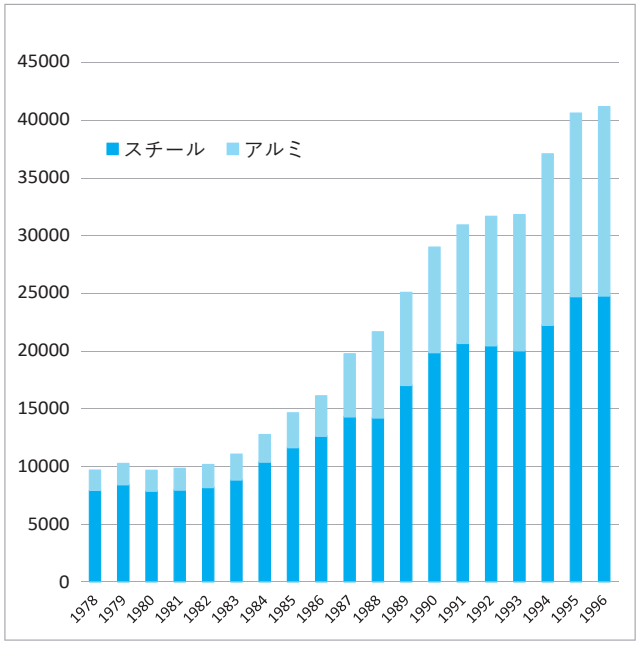

図 日本の飲料缶生産量の推移（単位　100 万缶）
（出典：1997 年 12 月 20 日六郷生活学校発行「リサイクルが地域に新たな絆をつくる第 7 号」のデータから作成）

表 3 六郷生活学校空き缶回収量

年	回収量　kg	年	回収量　kg
1980	30	1989	5991
1981	125	1990	6247
1982	221	1991	10456
1983	878	1992	8988
1984	828	1993	13282
1985	1185	1994	12471
1986	1349	1995	10357
1987	3986	1996	9010
1988	5745	1997	

（出典：1997 年 12 月 20 日六郷生活学校発行「リサイクルが地域に新たな絆をつくる第 7 号」のデータから作成）

——流れが変わったと思えた時は、あったのですか。

企業が全然動かなかった。なんだかんだいっても。そうしたら、1989 年秋でしたか、北海道新聞社から電話が来たんです。「おたくで空き缶のプルタブを集めていると聞いたんだけれども、そういった資料があったら送ってくれませんか。どうしてかというと、北海道で鶴のタンチョウが死んで、お腹を切ったら腸の中からいくつものプルタブが出てきた。どこかでプル

タブの問題に取り組んでいるところがないか聞きまわったら、お宅でやっていると聞きました」というので、資料や写真を送りました。そして、私が「タンチョウが死んだ写真を送ってくれませんか」と頼んだら、送ってくれた。タンチョウのこんな大きな写真でした。それを全国の方々が集まる場所に持って行って、「このタンチョウがプルタブを飲み込んで死にました。写真を北海道から送ってもらいました」と話をしました。それからガーッと事態が動いていったのです。

■メーカーと主婦らで、乾杯

――平成元（1989）年12月に飲料メーカー6社との対話集会を行い、翌年の1990年1月に集会に出席していたメーカーのサントリー、アサヒ、キリン、サッポロ、日本コカ・コーラ、宝酒造、そして日本生協連から「ステイオンタブ採用」の連絡が入ったと聞きました。

そうなんです。メーカーの方に「乾杯しますか、矢野さん」と聞かれ、「乾杯しましょう！」と答えました。各社のビールを平等にそろえ、食べ物は、シイタケを煮る人、タケノコを煮る人、おにぎりを握る人、と皆で手分けして持ち寄って、皆で乾杯をしたんです。

「メーカーは自社の利益を追求しているだけ」と批判する人もいますが、私はそういう感じはしなかった。お互いの立場がありますから。メーカー数社と六郷生活学校の対話集会の後、「ここを一歩出たら（メーカー各社間の）戦争なんですよ」とおっしゃる人もいました。おいでになったのは、各社、部長や課長でしたが、各社の中でどのように上司に報告するかは、個人差がありますでしょう。ですから、私が心掛けたのは、対話集会では、真ん中のテーブルにごみとして集めたプルタブの山を置き、写真を撮り、記録をつけて資料を作り、「この前の対話集会では、こうでした」と担当者に渡しました。

――メーカーとの対話集会は、綿密な準備と戦略に裏打ちされていたのですね。

対話集会にこぎつけるまでも大変だったんですよ。メーカーさんのところに、「私たち資源の勉強をしているんですけど」と訪ねていっても、「消費者団体？ふん」ていう感じで、持って行った資料も見てくれませんでした。最初はみなそういった感じでした。徐々に私たちの活動が新聞などで紹介され、対話集会にも参加して下さるようになったのです。

六郷生活学校の活動では、プルタブ問題が注目されますが、いろいろなことに取り組みました。アルコール入りの飲料が出回りだして、おじいさんが4歳の孫にジュースだと思ってあげたら、孫の顔が赤くなってしまったとか、逆に酒だと思って買ったらジュースだったと嘆くおじさんもいました。「果汁飲料とアルコール飲料の見分けがつかず、まぎらわしい」と問題提起して、「酒」の字を大きくするとか、絵柄で工夫するなど表示方法を改善してもらいました。

――最近は、主婦が少なくなりました。主婦が主力でやってきた消費者運動には課題もあるのでは。

生活学校は、全国に組織があり、いろいろな人に会うことができます。確かに、リーダーがつぶれると、後継ぎがいない、といった問題はあります。でも、地域の人たちの声って、（世の中を良くするのに）役に立つのです。活動を続けていきたいと思います。